

生活しべるを 向上させる

ウガンダ

サラヤ (消毒液の販売)

水道なき国で 人命救う消毒液

水が出ない病院がある。アフリカ東部に位置するウガンダの都市エンテベ。郊外にあるムピジ県立ゴンベ病院は数百床を抱える地域の中核的な総合病院だ。それなのに、病室の蛇口をひねっても水はまず出ない。数日に1回水が出ると、全職員が総出で桶などためる。このやや濁

った水は、手術前に手や手術道具を洗うのにも、手術中に傷口を清めるのにも使われる。感染症にからない方が不自然なほどの衛生事情だ。かつて、この病院で分娩した妊婦は毎月4〜5人のペースで敗血症で亡くなっていた。マラリアに感染して運び込まれた子供たちの多くが、

下痢性の病原菌に感染して苦しんだ。各国の援助がこの病院に入ったが、水がなければ状況を改善する手が無い。水をクルマで運んできても一時的な対策にすぎないだろう。だが、この病院では今、出産を理由とした敗血症による死亡はほぼなくなった。下痢で苦しむ子供の数も減っている。水道事情が変わらないのに、なぜ感染症が激減したのか。「消毒液」がその答えだ。現在、病室から処置室、手術室、分娩室、診察室など至る所に噴霧式のアルコール消毒液が設置されている。分娩に立ち会う助産婦や帝王切開手術を執刀する医師らは、この消

毒液で手指を入念に消毒して分娩室に入るようになった。置かれているのは石鹼や消毒液の製造を手がけるサラヤ(大阪市)の商品。援助の一環としてサラヤが提供したものだ。きれいな水を確保するのが最優先であり、水を確保できてようやく消毒液を必要とする衛生水準に達する。水は安価だが消毒液は高価。新興国では普及させるのが難しい——。それが常識かもしれない。ウガンダでは違った。水道事情を改善させるには莫大なコストがかかるので、水を行き渡らせようとすれば運ぶしかない。同量の水と消毒液を運ぶ物流費はほぼ同じだが、その



UGANDA



慈善事業がビジネスに変わる

これはビジネスになる。サラヤは

衛生効果はまるで異なる。水で手を洗おうと思えば流してすすぐために一定の量が必要だが、消毒液を噴霧すれば微量で細菌をほぼ殲滅^{せんめつ}できる。

自社製品を病院に置いてもらうフィールドテストなどを経て、ウガンダでの消毒液販売事業の準備を始めた。慈善事業ではなく営利事業として取り組むことにしたのは、その方が持続可能になるはずだという考えがあったからだ。ウガンダの人口は現在



病室や通路、手術室など至る所にサラヤの消毒液が置かれている

約3400万人で、うち半数が15歳以下と若い。2050年には9000万人を超えるとされる。急激な人口増加、そしてそれが引き起こす衛生面などの社会問題は、大きなチャンスとなる。

サラヤは、ただ消毒液を日本から輸出して販売するのではなく、現地ウガンダで消毒液を製造して販売しようとして試みている。

2011年5月、現地法人サラヤ・イースト・アフリカ(SEA)をウガンダに開設。同社は、現地の製糖会社カキラシユガートと合併で消毒液を製造する子会社を設立した。

カキラシユガートはウガンダで生産されるサトウキビから砂糖を作っている。その副産物である廃糖蜜を発酵させて、燃料用アルコール(バイオエタノール)を製造する準備を進めている。このエタノールの一部を消毒液の原料として転用する。サラヤが持つノウハウで、濃度を整え、添加物などを加えて、効果の高い消毒液として容器に充填して売り出す。SEAの宮本和昌代表は「まずは病院向けに販路を作る。そして、メード・イン・ウガンダの消毒液を普及させたい」と言う。

将来的には、サラヤはこのモデルをウガンダを起点に東アフリカ全体に広げる予定だ。

